

教育講演「出雲地方の医学史・洋学史」

[教育講演2]

社会史的にみた近世島根の医療

岡 宏三

島根県立古代出雲歴史博物館 専門学芸員

山村の医者

出雲市佐田町八幡原は、神戸川沿いの山間部に位置する小盆地である。ここに岩崎家という旧家がある。古くは医者を、江戸時代には村の庄屋を勤めていたことしか知られていなかった家である。

天正14年(1585)、同家の岩崎宗右衛門尉は、曲直瀬道三の門人と推定される清易齋恵心から道三が元亀4年(1573)に記した「診候薬註一紙之約術」と題する切紙の写しを与えられている。また『七表陽脈主属之図』『宜禁集』『小児方(退齡小児方)』『捷徑弁治集』をはじめとする道三の著も伝来している。

岩崎家にはまた「慶長壬子仲秋日、於雲州塩氏平宣政開板」の刊記を持つ古活字版『医法大成論』も伝来する。「慶長壬子」は慶長17年(1612)。「塩氏平宣政」は詳細不明な人物だが、恐らくは「塩治宣政」といい、16世紀前半に滅んだ出雲西部の国人・塩治氏(後塩治氏)の系譜をひく人物だろう。没落した大名や国人の子弟が諸芸道で活躍している例としては、荒木村重の子・岩佐又兵衛(絵師)、出雲では朝山慶綱の孫・意林庵(儒者、仮名草子作者。父は朝山日乗)らがある。出版のほとんどは上方であった頃、地方における本格的書籍出版は幕末～維新後であったから、17世紀初頭に出雲においてこのような本格的医書が開版されているのは極めて異例である。

慶長元年(1596)には古活字版『十四経發揮』、翌年には同じく古活字版『新編医学正伝』を相次いで出版した小瀬甫庵は、豊臣秀吉没後堀尾吉晴に仕え、関ヶ原の合戦後吉晴の移封に伴い出雲にあった。甫庵が吉晴の死後出雲を去ったのは慶長17年なので、この間に塩治宣政は甫庵と何らかの交渉があり、甫庵を介して上梓したと考えたほうが妥当だろう。

戦国の動乱期、大陸や南蛮の医学は博多や堺をはじめとする窓口から流入してきたが、その一方で京をはじめとする上方は政争戦乱の絶えざる場となり、地方の荘園からの貢納が絶えて経済的に窮迫した公家、僧をはじめ、様々な人々が地方を頼って下向した。あるいはまた吉田家(卜部氏)のように、16世紀後期以降、地方の神職に神道裁許状(神主免許)を発給することで神道主宰の家として諸国に勢力をひろめていった公家もあった。このような貴紳、文化人、技能者らが都から地方へ下向する潮流のなかで、曲直瀬流の医学は出雲に波及し、また諸大名に仕官した医師らによって医学は地方へと伝播した(岩崎家については、天野陽介・小曾戸洋氏の報告がある)。曲直瀬道三が医学を学んだのが下野の足利学校であるように、とかく現代の我々の脳裏にある「文化・技術は中央の独占」というイメージは近代以降であり、それ以前は人口、経済の流通とともに文化・技術は必ずしも大きな格差があった訳ではなかったことを再認識する必要がある。

寺社の医療

中世、寺院が医療の担う機関としても機能していたことは言うまでもないが、出雲の寺院における具体的事例は史料の制約もあって明らかではない。ただし天台の古刹・鰐淵寺(出雲市)では、遅くとも鎌倉時代末期(14世紀初頭)には茶が栽培されていた。もと鰐淵寺の末寺と推定される一畑薬師(同

市)は「目の薬師」として名高いが、参詣者は同寺で栽培された茶湯(焙じ茶湯)を求め、薬師如来の真言を唱えながら臉につける古い風習が残る。

近世の場合ではどうか。松江城下の西端の丘陵に天倫寺がある。近世には出雲における臨濟宗寺院の筆頭としての寺格を誇っていたが、同寺の典籍類のなかに「升汞丹製法秘録・金瘡秘訣」が現存する。「金瘡秘訣」は華岡青洲の「金瘡口授」,「升汞丹製法秘録」のほうは青洲の友人・中川修亭が著した水銀薬物製法書である。奥書に「文政十年(1827)亥五月,於神門郡荻原邑紫藤園先生塾中,授写之」とある。

「紫藤園先生」は荻原村(出雲市荻原町)の在村医・西山砂保(1781~1839)で、寛政12年(1800)に京の中西深齋に古医方を、文化6年(1809)に紀州の華岡青洲に外科を、文政6年(1823)には長崎の鳴滝塾に入門し、湊長安を介して蘭方を学び、同9年にシーボルトから修業証(島根大学所蔵)を得ている。前述の資料は砂保が春林軒に在塾中に書写したものを、更に天倫寺の僧が砂保の塾で書写したのだろう。古来寺院と医療は深い関係にあったものの、近世の寺院(僧)における医術については詳らかでないが、古来の薬方にとどまらず砂保のような医者入門していることは、改めて再考する価値があるのではなかろうか。

医療の処方・施術も行ったといえ、医書の残存の傾向からみて、寺院よりも神社(神職)のほうに熱心ではなかったかと思う。近世の在村医の経歴に着目してみると、富農富商の子弟が遊学して医術を学び分家を創出する事例を多く見かけるが、神職の子弟も同様な経緯で医師となり、分家創出している事例を目にすることがある。

出雲大社では、伊勢と同様に16世紀以降諸国の担当区域(檀場)に出向いて御札を配布し初穂料を集金する御師がおり、海苔、スルメなどの産物とともに手製の薬を出雲から暖場への土産としていた。更に幕末には、越中富山の薬問屋と提携し、薬問屋は出雲大社を窓口として出雲国内での売薬を、出雲大社は北陸等の壇場での配札代行業を薬問屋に委託することも行われていた(『富山売薬史史料集』)。

出雲大社に対して、一般の神社の場合ではどうであったか。弘化4年(1847)、松江藩が「医道之一端も不弁、奇薬妙制杯与申触し、猥りニ病人療治致間敷」と、医療の引き締めを触れ出した際、これに賛同した大原郡上佐世村(雲南市大東町)の長妻近江ら4人の神主は「銘々共儀、小身之社家故、無拋訳ニ付先年より数代相統医術執行仕候、則別紙之通夫々之医家江入塾、医術修行仕候」と、医家に入塾して修行した者であること、医療の向上貢献に努めることを誓約している。概して近世の神社は、寺領のほかには葬式や法事等の収入があった寺院に対し社領が僅かで、祈祷と医業は貴重な収入源であった。長妻らの誓約を取り次いだ同地域21ヶ村の神職を統括する幣頭職にあった須我神社の神主・諏訪石見(見碩)もまた松江藩御典医・北尾徳庵の門人で、須我神社に残る医書によれば、中沢令鈍なる医師に師事したことも窺われるだけでなく、天保7年(1836)には西山砂保の塾で「痘疹必要」を書写しているほか、「西洋薬剤分量考」(同10年書写)も伝来する。

このように寺社、特に神職は、地域の人々にとって祭祀や祈祷により謂わば心のケアの役割を果たすのみならず、往々にして医療による救済も担う立場であったことが知られる。

また天保末頃(1840年代後半)、松江藩は領内の医師の管理統制のため郡ごとに複数の組合を構成させ、藩の医学教育機関・存濟館管轄下の下部組織としているが、医師たちが日常においてどれだけ横の繋がりを持っていたかについては今後の課題である。

「医療の限界」と宗教

200年以上にわたった平穏が続いた近世には、医書の出版が活発となり医師の数も増大した。漢方の蓄積に加えて、南蛮流ついで紅毛流医学の流入は、特に外科医療に大きな進展をもたらした。一方で、日々向上に努めてなお医療技術の限界に直面する機会も少なくなかった。手の施しようもないまま衰弱

してゆく患者と向き合うなかで、如何にして苦痛と不安を和らげ、穏やかに死を迎えさせるかに心を悩ました医師は少なくなかったのではなからうか。

浄土真宗における、純粋な信仰で名の知られた在家信者の伝記集『妙好人伝』初編に、邑智郡高見村（邑南町高見）の医師・石橋寿閑の逸話が収録されている。寛保・延享の頃（1741～48）、「坊主が地獄極楽を説くのは營利をむさぼるため、医者たる者は医書に通暁して病人に向かうべきもの」と、梁瀬村（美郷町梁瀬）に住む医師仲間の錦織玄秀に言い放っていた寿閑は、数年後地域にならびなき真宗の篤信者になっていた。そのきっかけは、臨終の床にあった六歳の愛娘から「わしは死すればどこへ行く事ぞ」と問われたことにあった。答えに窮した寿閑は咄嗟に口にまかせて「手を合わせて念仏を唱えれば往生できる」と話し聞かせたところ、娘は喜びに満ちた顔で称名しつつ命を終えたという。

同書によれば、錦織玄秀もまた熱心な真宗の信者であったという。享保18年（1733）玄秀は重篤に陥った備中笠岡の代官井戸平左衛門の診察に前任地の掛かりつけ医として招かれた。その診察録には、発症以後診察にあたった医師11人の処方と症状の経過とともに、早期に玄秀へ問い合わせをしなかった彼らの姿勢に対して「無病の時は「御主様」と云いて頭を附、地下人に威を国中に振えども（中略）唯だ利欲を本と為し、天命を恐れず、主君絶命の期に於ても遊女と戯れ、虚偽奸佞成る族（中略）浅間敷世界哉」と痛烈な非難を記している。玄秀もまた医師としての強い自負心と使命感は寿閑と同じであったことが窺われる。

現実の認識と革新

錦織玄秀と同じく梁瀬村の医師であった尾原君山（1785～1872）も生涯にわたって熱心な真宗門徒であったが、寿閑や玄秀とは異なった哲学を有していた。尾原家は曾祖父玄悦の代から医を業とし、君山も享和2年（1802）安芸山県郡大朝町（広島県北広島町）の劉元高に入門して医術を修めた。翌3年上京して高須大翼に『春秋左氏伝』を学び、日々社会で起こった事象を書き留め、如何に行動すべきかを考えるとともに、その事柄を後世に伝えることの重要性を学んだ。彼は元高に対して「大恩、山ヨリモ高シ」と記している。

かくして君山は、『尾氏春秋』（39巻。うち21～38巻欠）と題して、文化8年（1811）から晩年の明治5年（1872）までの61年間にわたって日々起こった事象を書き留め続けている。例えば文政9年（1826）に発生した疫病流行による梁瀬村・乙原村ほか隣村における死者91人、天保5年（1834）の痘瘡流行による死者についても、君山自身が診察した患者をはじめ、隣村の死者の所在、名前、年齢を入手し得る限り逐次記録している。ちなみに梁瀬村の当時の人口は推定400人超、同村における痘瘡による死者は67人、君山が診察した死者12人の平均年齢は3.6歳であった。

君山に実子なく、養子（実父は石見銀山同心・福岡仙平）杏陰（逸斎。1821～71）は、天保9年（1838）広島藩医後藤松軒、11年（1840）長崎の吉雄塾、弘化3年（1846）には長門の青木周弼に入門している。曾孫・尾原義雄の「曾祖君山翁行状」によれば、「翁、僻陋に在りと雖も、つねに門生の京阪に遊学する者、及び商賈往來の輩に囑して、四方の異聞を諜報せしむ。ここをもつてよく天下の大勢に通ず」とあるが、君山は主に銀山の代官所経由で江戸の情報を、杏陰を通じて蘭学や長崎の知識・情報を入手したようで、天保15年（＝弘化元年、1844）の『尾氏春秋』にはオランダ国王（ウィルヘルムⅡ世）の開国勸告使節の長崎入津一件を逐次書写している。また同年九日市の医師に西洋医学について質問された際「イヘイ（Adolphus Ypey, 1749～1820）の話をし、翌2年には『舎密開宗』を抜き書きするとともに、この年から毎年、和暦とともに「オランダ暦（西暦）」を、更に数年遅れて清朝の元号（咸豊）も併記している。特に嘉永6年（1853）のペリー来航以降は、江戸・長崎をはじめとする外交交渉から政局混乱にかかわる市中の巷説まで、互版等絵図類を含めて逐一書き留め、『尾氏春秋』は、いわゆる膨大な

『風説留』の様相を呈するようになる。

このようななかで万延元年(1860)、杏陰は青木塾から痘苗を取り寄せ、君山とともに住民の児童15人に種痘を実施、石見東半部における種痘の嚆矢となった。以後明治2年(1869)には大森県の引痘掛に、同4年には子息の晴洋(1849~1903)も引痘掛に任じられている。

石見西部の津和野藩高角村(益田市高津町)の米原恭庵、安芸の三宅春齡、出雲の織春象が種痘を開始したのはいずれも嘉永2年(1849)で、君山父子による種痘実施の時期は周辺地域よりも遅い。これは当時の種痘が主として医師らの自発的、献身的努力(資金面も含め)に依存していたためであり、藩等の公的理解・支援を得た地域とそうでない地域では自ずから普及に差異が生ぜざるを得なかった。換言すれば、維新後に制度化されるまで基本的に君山父子のような各地の医師の自発的、献身的努力に支えられて地域の種痘は行われた。

来世に対しては阿弥陀の救済に委ね、現世にあっては自己の不完全さを自覚しつつも「夙夜強いて医事を学んで病者を待つ」(『呈蘆溪上人書』)姿勢は、前述の寿閑、玄秀と同様だが、変動する内外の情勢を見据えながら医療の革新を図る姿勢は君山ならではの姿勢である。と同時に、その姿勢は、幕末における日本の在地の医師の典型例でもあったように思われる。